

保育者の自己形成と実践コミュニティの変容

－対話的自己モデルによる実践コミュニティの分析－

*香 曾 我 部 琢

Transformation of Child Care Worker's Community in Self-Formation

KOUSOKABE Taku

要 約

本研究では、保育者が熟達者へと成長していく過程で、自らが所属する実践コミュニティとどのように相互作用してきたのか、その実相を明らかにし、保育者の成長に与える実践コミュニティの影響について総合的に検討を行う。具体的には、保育者の自己形成について、実践コミュニティがどのような影響を与えてきたのか、SCAT (Steps for Coding and Theorization) によって得られた構成概念をもとに対話的自己モデルを構成し、分析を行う。その結果、実践コミュニティの変容が、(i) 保育実践コミュニティの成員性の獲得期、(ii) 同じ保育所の保育士との保育実践コミュニティの活性期、(iii) 他の保育所の保育士や保護者へと保育実践コミュニティの拡大期、(iv) 保育実践コミュニティと保育研究会の融合、地域住民と自然環境の内含期、以上4つに時期区分できることが明らかになった。そして、保育者の実践コミュニティが、特定の仲間を軸に量的、質的な両面からの影響を受けて、自らの保育実践コミュニティにおいて組織アイデンティティを強め、さらにナレッジ・システムを構成することが示唆された。

Key words : 実践コミュニティ

自己形成

対話的自己

SCAT

山脈的自己

1. 問題と目的

(1) 社会環境の急激な変化と保育者の新たな役割

現代の日本では少子化、過疎化が急激に進行し、さらに近年の経済の悪化によって財政が厳しい状況になるなど、子どもやその家族を取り巻く社会的な環境が急激に変化し、さらに都市部と地方においてその状況が異なるために、問題が多様化している現状が見られる(向平, 2011)。さらに、核家族化などの影響から家庭での教育力の低下が進み、子どもの基本的な生活習慣の獲得や

規範意識などの育ちを保障するために、子どもへの保育だけでなく、子育て家庭への支援という新たな専門性を保育者が培うことが求められている(名須川, 2007)。

(2) 保育者の専門性向上における過酷な状況

現代においては子どもをめぐる問題が多様化し、子育て支援と言う新しい専門性を培うことが保育者に求められている。それに加えて、近年では長時間保育、休日保育、病後児保育など、地域や家庭によって異なる保育ニーズを的確に捉え、それらに対応する能力が必要とされてい

* 宮城教育大学家庭科教育講座

る(大嶋, 2009)。保育者にさまざまな能力が求められている一方で、多様な保育ニーズに対応するために保育者の勤務体制はより複雑化し、長時間化しており、実際の保育者の就労条件はこれまでも低賃金や就労時間の過多が問題とされている(神谷ら, 2011)。つまり、保育者は、厳しい労働環境の中で次々と新たな専門性を身に付けていくことが求められる過酷な状況下に置かれているのである。

(3) 保育者に求められる専門性の2つのパラダイム

現代社会における急激な社会環境の変化において、豊富な知識や高い技術に支えられた「技術的合理性」モデルでは対応できない状況が生じ、新たな専門性を捉えるパラダイムが求められるようになった。そして、ショーン(Shon, 1983)が示した「反省的実践家」モデルが紹介されると、単純に知識の量や技量だけではなく、保育実践の中における省察的な意識が保育者の専門性として結びつけられるようになった。しかし、一方で、子育て支援に関連して、保護者への保育相談やソーシャルワークなどの専門的な知識や技術を習得することへの現場の要求も高く、保育領域においてはその専門性を捉えるパラダイムは二項対立的に捉えられてきた(香曾我部, 2011)。

(4) 現代社会において求められる保育者アイデンティティの形成

保育者の専門性をめぐり2つのパラダイムが相対する現代において、足立(2009)は、保育者の成長について、危機を乗り越える経験が重要であることを述べ、近年の急激な社会変化による危機体験が、保育者の専門性や意識に変容を求め、「保育者としてのアイデンティティ」を再形成することを示唆した。そして、保育者の成長が保育年数だけで測れるようなものではなく、どのような時期に、どのような危機を体験し、保育者アイデンティティを形成したのか、その変容していく過程を知ることが、急激に変化する現代社会における保育者の専門性・資質向上を解き明かすために不可欠であると述べている。また、香曾我部(2012)においても、急激に進む少子化、過疎化による影響を受けながらも、保育者が葛藤を抱きつつも自らが理想とする保育実践を実現し、成長していく中で、保育者アイデンティティを形成している過程を明らかにし、保育者の成長において保育者が自らの職業的アイデンティティを形成することの重要性を示した。

(5) 自己形成におけるコミュニティの役割

さらに、保育者アイデンティティについては、実践コミュニティが強く影響を与えることが言われており、「共通の専門スキルや、ある事業へのコミットメント(熱意や献身)によって非公式に結びついた人々の集まり」である実践コミュニティと自己形成の関連性が示唆されてきた(E,Wenger 1998)。香曾我部(2013)においても、アイデンティティを包含する概念として自己形成を示し、保育者の自己形成において実践コミュニティと理想とする保育実践に関する展望を共有化することの重要性を示した。つまり、保育者アイデンティティや自己形成など保育者個人の変容だけでなく、その保育者を取り巻く実践コミュニティの在り様やその変容も含めて捉えることで、保育者の成長を明らかにすることができ、さらに保育者の専門性について新たな視点で捉えることが可能と考えられるのである。

そこで本研究では、保育者の保育者アイデンティティを包含した概念である自己形成と実践コミュニティの2点に焦点を当て、それらが相互にどのように関わり合いながら、保育者が成長していくのか、それらが関わり合いながら変容プロセスを明らかにする。そして、そのプロセスの特徴をもとに、現代社会における保育者の専門性について検討を行う。

2. 研究方法

(1) 分析の理論的枠組みについて

保育者の自己を捉える理論的枠組み

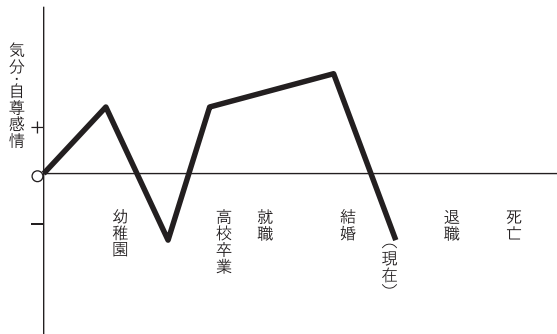
本研究で焦点化した自己という概念は、ジェームズ(W. James)は自己を純粹自己「I」と経験自己「me」に分けて捉えることを提案し、心理学に取り入れた。さらに、エリクソン(E. H. Erikson)は自己の同一性を重視し、社会の中で人々が人生の各段階において自己を構築していく理論を構築した。近年では、従来の自己を静的で、唯一の存在として捉える立場に対して、自己を「～としての自己」が複数集合し、自己同士が対話的な関係を結び、つねに動的で、流動的な存在であると捉えたハーマンス(K. Hermans. 1993)らの『対話的自己』の概念が近年注目されている(サトウ, 2013)。香曾我部(2013)においても、めまぐるしく社会環境が変化する現代において、保育者が社会的な状況の変化を感じ取り、過去の保育実践を省察する際に、自己において過去の自分と今の

自分が対話的な関係を築いていることが示された。そこで、本研究では、保育者の自己を捉える理論的枠組みとして、動的で流動的に自己を捉えるハーモンスが提唱した「対話的自己」の概念を用いることとした。

(2) 理論的枠組み

本研究では、保育者の自己形成に関する語りを引き出すために、刺激素材を用いようと考えた。そこで、保育者アイデンティティや保育者としての熟達度と相関性が高いと示された「保育者効力感」に着目した。そして、Figure 1のように縦軸を「保育者効力感」、横軸を時間

Figure1 ライフラインの実例(ブラマー, 1994)¹



の流れとした図を、インタビューイーに作成してもらい、その図を視覚的な刺激材料として半構造化インタビューを行った。このように横軸を時間の流れとし、縦軸に自尊感情、効力感などを記入して、その図を用いたインタ

ビュー方法を「ライフライン・インタビュー・メソッド (Life-line Interview Method: LIM)」と呼び、時間の経過が伴うインタビューイーの心情の変化を捉えるのに有効である。LIM に関しては、横軸は人生のある時点から、ある時点までの時間経過(年齢)を表すが、縦軸に関しては研究目的に応じて特定の感情や認知の変化を表す。また、縦軸に関しては、中心を 0 基準として示されている。

(3) インタビューの手続き

手続きは以下のとおりである。まず、保育者効力感について、三木・桜井(1998)が示した保育者効力感の定義を示した。次に、三木・桜井(1998)らの保育者効力感の尺度項目を Table 1 に示し、保育者効力感の具体的な事項を示した。そして、保育者効力感を主観的に評定した値をもとにライフラインを作成した。最後に、そのライフラインを共に見ながら、実践コミュニティの変容について半構造化インタビューを実施した。

(4) 研究協力者の選定

本研究では、現代社会における保育者の自己形成と実践コミュニティの変容プロセスの相関について明らかにすることを目的としている。そのため、研究協力者の選定にあたっては、保育者としての経験年数だけではなく、その保育者が実際に保育者として熟達しているのか、実践や研究に携わった経験や他の保育者への影響力などを考慮した。また、急激に変化し、多様な問題を抱える現代

Table1 保育者効力感尺度質問項目

- | |
|---|
| (1) 私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う |
| (2) 私は、子どもの能力に応じた課題を出すことができると思う |
| (3) ※私が一生懸命努力しても、登園をいやがる子どもをなくすことはできないと思う |
| (4) 保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う |
| (5) ※私は保育者として、クラスのほとんどの子どもが理解できるように働きかけることは無理であると思う |
| (6) 私は、クラスの子ども1人1人の性格を理解できると思う |
| (7) ※私が、やる気のない子どもにやる気を起こさせることは、むずかしいと思う |
| (8) 私は、どの年齢の担任になっても、うまくやっていけると思う |
| (9) 私のクラスにいじめがあったとしても、うまく対処できると思う |
| (10) 私は、保護者に信頼を得ることができると思う |
| (11) 私は、子どもの状態が不安定な時にも、適切な対応ができると思う |
| (12) 私は、クラス全員に目を向け、集団への配慮も十分できると思う |
| (13) 私は、1人1人の子どもに適切な遊びの指導や援助を行えると思う |
| (14) ※私は、園で子どもに基本的生活習慣を身につけさせることがなかなか難しいと思う |
| (15) 私は、子どもの活動を考慮し、適切な保育環境(人的、物的)に整えることに十分努力ができると思う |

※印は反転項目であることを示す。

Table2 H町の少子化、過疎化の現状

	人口	出生数	変遷(公幼→公立幼稚園、公保→公立保育所、こども→認定こども園)
昭和 55 年	13,190	202	
昭和 60 年	13,007	167	
平成 2 年	12,541	126	
平成 7 年	12,174	94	H7 町内唯一の私立幼稚園が公立幼稚園になる。(公幼1、公保5)
平成 12 年	11,483	92	H9 幼児教育推進会議を設立し、幼保一元教育の推進、少子化対策、効率的運用を議論する
平成 17 年	10,761	81	H14 幼児教育センターを設立し、幼児教育行政の一元化をはかる。幼保の教育課程を統一。公立保育所を小学校に併設、公立幼稚園に認可替え(公幼 2、公保 4)
平成 22 年	10,009	51	H18 公立保育所を小学校に併設、公立幼稚園に認可替え(公幼 3、公保 3) H18 公立幼稚園1と公立保育所1がこども園1に統合。(こども 1、公幼 2、公保 2) H19 こども園が認定こども園に認証 H22 こども園と子育て支援センターの合築新施設の開園

社会との関連性を明らかにするために、少子化、過疎化、高齢化が進んだ小規模地方自治体を対象にしようと考えた。そこで、ここ 20 年で出生数が半分以下になった G 県 H 町の保育士 A を選定した。なお、H 町の現状については、Table 2 に、選定理由については下記に示した。

保育士 A は、昭和 48 年に H 町に採用され、3 年目には研究に携わり、その後も県指定の公開研究に携わってきた。H 町の研究を主導し、B 町の保育研究会の委員や会長を歴任、県指定の公開研究を担当。副所長、所長となり、保育者をまとめて実践だけでなく研究も同時に行うことで、常に新たな保育実践を行ってきた。保育士 A への実際のインタビューは、平成 23 年 10 月から平成 24 年 3 月まで週 1 回程度で 9 回実施した。保育士 A へのインタビューは 30 分間～1 時間程度で合計 6 時間 18 分。

(5) 分析方法と手続き

本研究では、保育者の自己形成と実践コミュニティが相関しながら変容していくプロセスを明らかにすることを目指す。そのプロセスでは、いくつかの構成概念が相互作用することが想定される。そのため、大谷 (2008) が開発した比較的小規模の質的データに有効であり、明示的な手続きで、言語データから構成概念を紡ぎだしてストーリーラインを記述し、そこから理論(理論記述)を導き出すのに有効な研究技法である SCAT(Steps for Coding and Theorization)を用いた。なお、SCAT 分析の結果として示されたストーリーラインと理論記述は研究協力者

保育士 A に提示し、フォローアップ・インタビューを行った。

3. 結果と考察

(1) 時期区分

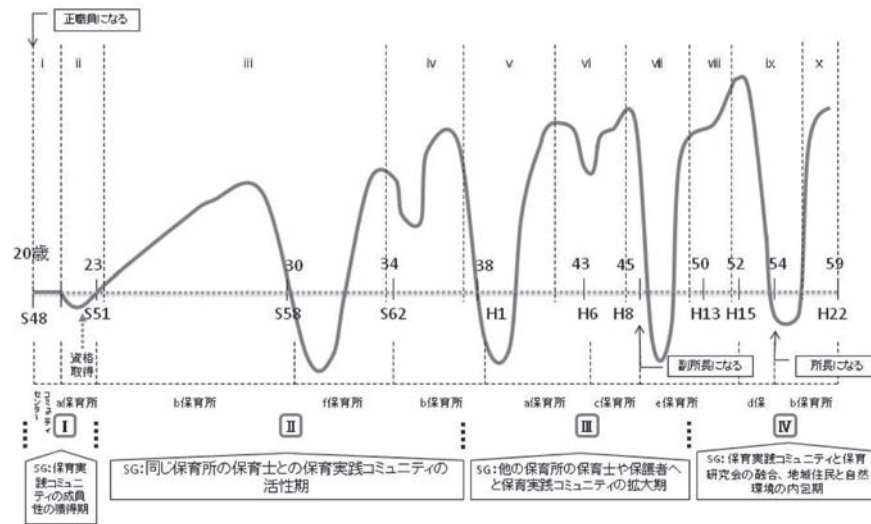
SCAT の手続きに従って、ストーリーラインを構成し、理論的記述を導き出した。そして、理論的記述をもとに、実践コミュニティが変容した時期として、Ⅰ期：保育実践コミュニティの成員性の獲得期、Ⅱ期：同じ保育所の保育士との保育実践コミュニティの活性期、Ⅲ期：他の保育所の保育士や保護者へと保育実践コミュニティの拡大期、Ⅳ期：保育実践コミュニティと保育研究会の融合、地域住民と自然環境の内含期、以上 4 つの時期区分を設定した。

以下、SCAT による i～iv 期のストーリーラインから得られた理論記述とその図式を結果として示し、さらにそれ

Figure2 対話的自己モデル



Figure3 保育者Aのライフラインの全体図と時期区分



らをもとに考察を示す。そして、その理論記述をもとに、Hermans(1993)らが示した「対話的自己」の概念をモデル化した「対話的自己」のモデルを用いて表し、時期区分における保育者の自己形成と保育実践コミュニティの在り様の関係を図式化しようと考えた。

(2) I期：保育実践コミュニティの成員性の獲得期【理論的記述】

- ① 当時のZ町役場のゆるやかな勤務体制による保育者と子どもとの出会いが、保育者Aの職業意識の変容を促し、その保育者の後押しが保育実践コミュニティの萌芽となった。
- ② 保母不足という状況の中で、一人でも多くの有資格者を得ようと保母たちが、保育者Aのライフイベント（結婚、出産）によって生じる困難を支援し

ようと、相互扶助システムによって積極的な援助を行ったことが、保育者Aの保育実践コミュニティの発生とその確立に寄与していた。

- ③ 保育士Aが保育士としてZ町において自らの保育実践コミュニティを発生させ確立するプロセスにおいて、第2次ベビーブームによる社会状況の急激な変化が強く影響を与えた。

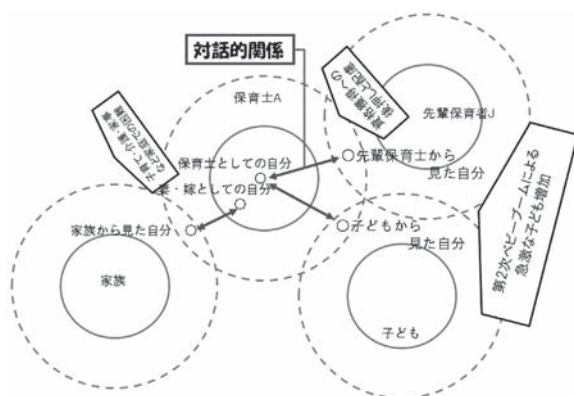
【考察i】

この時期、保育士Aは保育実践において出会った子どもによって「保育者としての自分」を生み出した。そして、さらに、保育者Aが保母資格を取得し、保育士として勤務することを後押しするような働き掛けを先輩保育者が行ったことで、「保育者としての自分」を次第に確立させて、先輩保育士達が築いてきた保育実践コミュニティの成員性を獲得していった。成員性を獲得する際に、自らの職業に関する信念に影響をうけていることから、「先輩から見た自分」と「保育者としての私」の間に起きた対話的關係によって、「発生の三層モデル」の一番上の「信念・価値観レベル」にまで影響を与えたことが示唆された。Figure5はFigure4の対話的自己モデルに「発生の三層モデル」^{注1}で組み合わせて示した統合モデルである。

このように、自己を単一的に捉えず、多様な自己が連なって山脈のような自己群を形成していると捉える概念に「山脈的自己」がある。(サトウ, 2011)

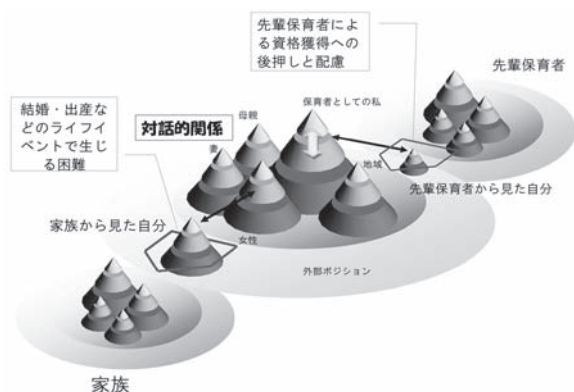
さらに、この時期、保育者Aは年齢的にも結婚、出産などのライフイベントの時期を迎え、配偶者や両親との関係から「妻・嫁としての自分」への認識を強めていた。

Figure4 I期における保育実践コミュニティと自己形成



しかし、先輩保育者によって家事や育児などへの配慮が行われたことで、さらに保育実践を積み重ねていく中で、「保育者としての自分」をさらに確立していった。

Figure5 Figure4を発生した三層モデルを用いて図式化した山脈的自己モデル

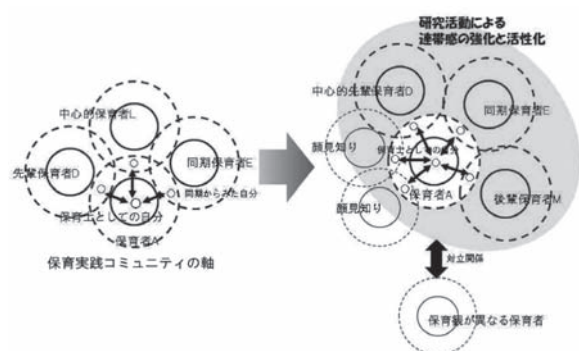


(3) II期:同じ保育所の保育士との保育実践コミュニティの活性期

【理論的記述】

- ① 資格取得後、研究委嘱園に異動すると、研究会に参画することとなり、そこで出会った保育者との関係が保育者Aの保育実践コミュニティの軸となった。
- ② 研究会では、はじめ保育者Aは見習いとして参加し、主任クラスの保育者と関係を深めるが、次第に自らが中堅的な存在へと育ち後輩保育者との関係を深め、保育実践コミュニティを活性化していった。
- ③ また、保育者Aはこの時期の異動によって、そこでペアを組んだ保育者とのつながりも生まれたり、保育研究会、組合活動などでの他の保育者との出会いによって、同僚や顔見知りを増やすことで保育実践コミュニティを増大させていった。

Figure6 II期における保育実践コミュニティと自己形成



- ④ さらに、研究活動を通じて、自らの保育観を確立するとともに、他の保育者とそれを共有させた。また、対立する保育観を持つ保育者とのかかわりのなかで、保育観を共有する保育実践コミュニティの連帯感を強めていった。
- ⑤ Z町の研究委嘱の際に実施する異例の人事によって、研究会が保育者Aと保育実践コミュニティの保育者(保育者D,E,M)たち、Z町の精鋭たちによって構成されたことで、保育実践コミュニティの活性化がさらに促され、研究会内での徒弟制によって保育実践コミュニティが支えられていくようになった。

【考察II】

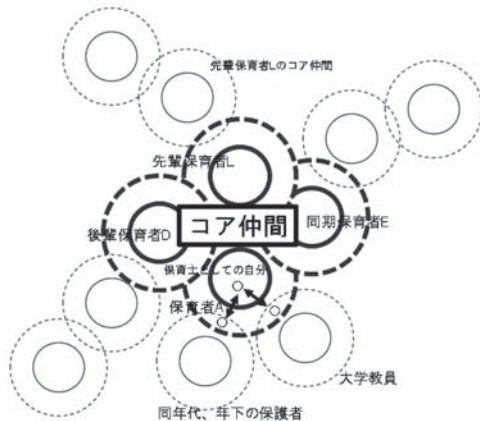
この時期、保育者Aは経験年数を積み重ねていくに従って、先輩保育者だけでなく主任として保育所の中心的な保育者や、同期の保育者と保育実践コミュニティを形成する中で、他の「保育者からみた自分」との対話的な関係を増大させることで、「保育者としての自分」を強化していった。さらに、自らが中堅となっていく過程で、後輩保育者や他の保育所の保育者とも顔見知りになることで保育実践コミュニティを活性化させることで、自己の中により多くの他の「保育者からみた自分」との対話的な関係を築き、「保育者としての自分」をより強化させ、自らの保育観を確立している。

(4) III期:他の保育所の保育士や保護者へと保育実践コミュニティの拡大期

【理論記述】

- ① II期を経て、同世代であることの共感に加えて、同じ保育所にペアとして勤務し、日々の保育実践を共にすることで「コア仲間」となる。「コア仲間」とは、付き合いのある保育者全員がなるわけではない。同じ保育所にペアとして勤務し、日々の保育実践を共に積み重ねていった充実感を共有している保育者を示す。
- ② 気の合う仲間がペアを組んだ保育者も保育実践コミュニティの構成員となる。
- ③ 幼稚園教育要領の改訂によって、大学教員とのつながりが生じ、新しい保育観を実践していく際に生じる問題解決に専門家助言ストラテジーを用いることで、自らの保育実践コミュニティの中心に位置付けられていった。

Figure7 Ⅲ期における保育実践コミュニティと自己形成



- ④ 自分の年齢が保護者と同じ、もしくは超えることで、意識や話しかけ方などが変容し、保育環境の充実などを共同で行える関係となり、保育実践コミュニティの構成員として位置付けるようになっていった。

【考察Ⅲ】

この時期、保育者 A は特定の保育者との関係性を強化して、保育実践コミュニティへの中核的な存在として「コア仲間」を構成し、さらにその特定の保育者を通して多くの保育者を取りこんでいくことで、保育実践コミュニティを拡大していく。また、これまで保育実践コミュニティは同じ町の保育者だけであったが、大学教員や保護者と、保育者以外の人々と関係性を築くなかで「大学教員・保護者からみた自分」を生みだし、「保育者としての自分」と対話的な関係を結ぶことで、自己を変容させていった。

(5) iv期：保育実践コミュニティと保育研究会の融合、地域住民と自然環境の内含期

- ① Z町の研究制度を1つの保育園に委嘱してしまうトップダウン方式から、町の全ての保育園から事例を取り上げるボトムアップ方式に変容させた際に、コア仲間全員が保育研究会の中心的存在となった。そして、研究力アップの為にいった研修や勉強会によって、コア仲間の結束をさらに強めた。
- ② 平成元年に改定された幼稚園教育要領に対する批判に対抗するために研究組織を強化する際に、すべての施設が共同して研究するシステムが保育者 A のコア仲間によって構築されたことで、保育

者 A の保育実践コミュニティが Z 町の保育研究会の組織へと融合された。

- ③ コアな仲間が所長になり、保育者 A も所長になると、保育実践コミュニティは研究への志向性を薄めて、管理者の視点と先輩保育者としての視点の間で葛藤しながらも、2つの視点で後進保育者を見守る志向性を持つようになった。
- ④ 所長になると、保育所のある地域住民との関係性を構築しはじめ、保育所を取り巻く自然環境への理解を深めつつ、地域住民と子どもとのかかわりを意識した保育を志向していくようになった。
- ⑤ コアな仲間が退職していくと、保育実践におけるかかわりは無くなり、同じ趣味や同じ地域行事を通じた仲間関係に移行した。しかし、保育実践コミュニティが喪失したわけではない、後輩の保育者への信頼から口は出さなくても見守る姿勢を維持しつつ、高齢者、介護、子育て支援など社会福祉や社会教育などへと人的ネットワークを広げて、保育者を間接的に支援しようとする保育実践コミュニティを形成していった。

【考察】

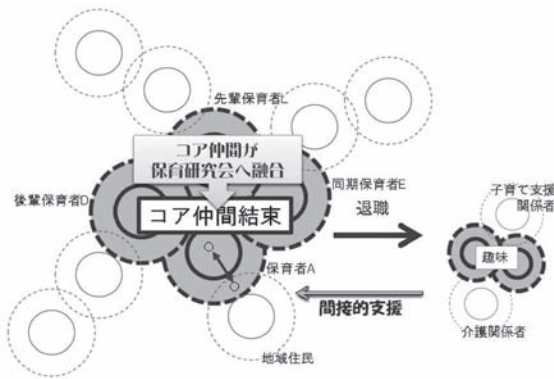
この時期、保育者 A は保育研究会の活動を通じて、コア仲間との結束を強めていった。さらに、自らが理想とする保育実践、保育観に対する批判を受け、中核的な体制をコア仲間組織することで、自らの保育実践コミュニティを保育研究会へと融合させていった。そして、その結果、コア仲間との結束を強め、コア仲間と共有している理想の保育実践を「Z町の保育」という言葉で示し、組織アイデンティティを形成した。

また、コア仲間が所長になっていくにしたがって、地域住民とかかわりを強めることで、「地域住民からみた自分」を生み出し、「保育者としての自分」と対話的な関係を結んだ。

コア仲間が退職すると、保育実践コミュニティは趣味を通じた仲間へと変容するが、その機能は直接的な支援こそなくなるものの、それぞれが介護や子育て支援などの福祉団体に関係を保ちつつ、そこでの新たな人々とかかわることで、現役の保育者を支える間接的な支援を行う「保育者としての自分」を意識するようになった。

¹ ローレンス・M・ブラマー(1994)人生のターニングポイント-転機をいかに乗り越えるか、 楡木満生、森田明子訳、ブレーン出版。

Figure8 IV期における保育実践コミュニティと自己形成



4. 総合考察

本章では、結果として得られた自己形成と保育実践コミュニティの変容プロセスの関連性をもとに、現代社会に生きる保育者の専門性向上について総合的に検討を行う。

保育実践コミュニティの量的な変化と保育者の専門性向上

本研究の成果として、保育者が専門性を高めていくに従って、自らの保育実践コミュニティの量的拡大を行っているが、その拡大が単純に関係する保育者が増えていくのではなく、中核となる気の合う仲間「コア仲間」を介して人々のつながることで増大させていくことを明らかにした。そして、この「コア仲間」は、他の保育者と「コア仲間」とともに自らの保育実践コミュニティを形成しており、さらにその「コア仲間」の「コア仲間」も自らの保育実践コミュニティを形成していると考えられ、そのつながりは有機的なネットワークとしてZ町の保育者全体に張り巡らされ、それが機能していると考えられる。つまり、保育者の専門性向上は、個人内だけの出来事ではなく、保育者を取り巻く他の保育者達集団の在り方と相互作用しつつその向上が図られていると考えられるのである。

保育者の専門性と組織文化

保育者集団の在り方やその相互作用について、IV期において、保育者Aたち自らが理想とする保育実践を「Z町の保育」と言って、他の町の保育と切り分けて語っている。このような同じ組織に所属する者が共通して持つアイデンティティを「組織アイデンティティ」と呼ぶ。そして、さらにその組織アイデンティティの基本的な部分と密接な関係を持つ文化的要素を「組織文化」(Wenger,2002)と

述べ、「組織文化」が所属する人々のアイデンティティを創出し維持していく機能をもちあわせたことを示唆した。すなわち、Z町の保育者が現代において専門性を向上させるためには、保育者個人を対象とした研修内容や体制の充実だけではなく、その保育者が所属する組織全体が持つ組織文化へのアプローチが必要になると考えられるのである。

保育実践コミュニティの質的な変化と保育者の専門性

また、熟達期において保育者が自らの専門性を高めていくにしたがって、私的なつながりであった保育実践コミュニティを公的な組織である保育研究会と融合することで、その機能をZ町全体へと拡充するだけでなく、その機能の質を私的なものから、公的なものへと変容させていった。この融合によって、保育者Aとコア仲間たちが抱いている理想とする保育実践を、Z町の保育者全体で取り組むこととなり、その成果を、研究によって保育者全体にフィードバックすることが保育者Aとそのコア仲間にも求められた。そのため、保育者Aらに求められる専門性として、保育者A個人の保育実践の内容だけでなく、それをZ町の保育者全体に広め、その結果をフィードバックするようなZ町の保育者全体の保育において得た情報をマネジメントする能力が求められるようになった。

保育者の専門性とナレッジマネジメント

保育実践コミュニティが公的な機関へ融合した際には、その中心的存在であった保育者Aとそのコア仲間たちには、Z町の保育者全体の保育実践を研究し、その成果をまとめることで、保育者達が持つ実践知をまとめ、それを外部に発表するだけでなく、その成果を自ら評価を加えつつ保育者全体へとフィードバックすることが、その専門性として求められた。このような、コミュニティを評価し、管理することでコミュニティが持つ知識資源を他のコミュニティの構成員に世話するシステムは「ナレッジ・システム」(Wenger,2002)と呼ばれる。ナレッジ・システムには主に知識を生みだし、それを適用するという2つのプロセスによって、知識資源を管理する働きを持つが、通常は認識されていないか、積極的に管理されていないことが指摘されている。つまり、現代社会に生きる保育者は自らの保育実践コミュニティにおいて知識資源を生みだし、それを多様な問題に適用することで、その知識資源をコミュニティのメンバーで共有するようナレッジ・システムを認識し、管理する力が求められていると考えられるのである。

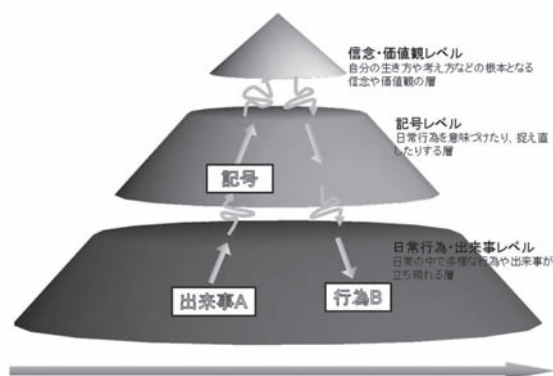
5. さいごに

本研究では、総合考察として、現代社会において保育者に求められる専門性として、(1) 組織アイデンティティを形成するような組織文化へのアプローチ、(2) 保育実践コミュニティのナレッジ・システムを積極的に管理する意識化すること、以上2つを示した。これまで、保育者の専門性に関する研究では、保育者が他者とかかわることの重要性は指摘されてきたが、あくまでも関係性を良好に保つ力や、積極的に同僚性を構築する力などと保育者個人の内に限定されてきた。しかし、保育者の自己形成が保育実践コミュニティの変容プロセスから大きな影響を与えられることが鑑みると、保育者が自らの保育実践コミュニティをより質の高いレベルで維持する力が保育者の専門性向上に重要であると考えられる。今後は、保育者による組織文化の醸成に向けた具体的な取り組みやその仕組み、保育実践コミュニティにおけるナレッジ・システムの管理方法などについて研究を深めていきたい。

注1

「発生の三層モデル」とは、「信念・価値観レベル」と「日常行為・出来事レベル」との間に、両者の変容していく際に両者に作用を与える中間層として、「記号レベル」を設定したモデルである。私たちは、日常生活においてさまざまな行為や出来事を経験するが、そのほとんどは強く意識されずに過ぎ去っていく。しかし、時折、「出来事A」のように、自分の信念や価値観に影響を与えるような記号(サイン)を発生させる出来事と出会う。人は、この出来事を自分の中で意味づけたり、捉え直したりすることで、信念や価値観を変容させる。信念の変容によって、これまでとは違う新たな行為Bを生み出すようになる。

Figure9 発生の三層モデル (サトウ,2009を著者が改変したもの)



文献

- 足立里美・柴崎正行 (2009) 保育者アイデンティティの形成と危機体験の関連性の検討. 乳幼児教育学研究 18, pp.89-100.
- Erik H. Erikson, Identity: Youth and Crisis, W. W. Norton & Company Inc.: New York, 1968, p. 9 (岩瀬庸理訳『主体性 = アイデンティティ—青年と危機』北望社、1971年、i頁)
- Hermans, K. & Kempen, H.(1993)The Dialogical Self. Elsevier Inc. 溝上 慎一・水間 玲子・森岡 正芳訳『対話的自己—デカルト／ジェームズ／ミードを超えて』, 新曜社
- 神谷哲司、杉山隆一、戸田有一、村山祐一 (2011) 保育園における雇用環境とストレス反応—雇用形態と非正規職員の比率に着目して. 日本労働研究雑誌 53(2・3), 103-114
- 香曾我部琢 (2011) 保育者の専門性を捉えるパラダイムシフトがもたらした問題. 東北大学大学院教育学研究科研究年報. 59(2), pp.53-68
- 香曾我部琢 (2012) 少子化、過疎化が地方小規模自治体の保育者の成長に与える影響. 保育学研究 50(2), pp.202-215
- 香曾我部琢 (2013) 保育者の転機の語りにおける自己形成プロセス—将来の展望の形成とその共有化に着目して. 保育学研究 50(1).
- 三木知子, 桜井茂男 (1998) 保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響. 教育心理学研究. 46(2), 203-211
- 三宅幹子 (2005) 保育者効力感研究の概観. 福山大学人間文化学部紀要 5, 31-38
- 溝上慎一 (2008) 自己形成の心理学 - 他者の森をかけ抜けて自己になる. 世界思想社, 92-98
- 向平知絵 (2011) 過疎地域における保育の実態と課題—奈良県十津川村のへき地保育所を事例に. 現代社会研究科論集, 5, pp.77-94
- 名須川知子 (2007) 親も共に育つ子育て支援とは. 保育学研究 45(2), p.251
- 大嶋恭二 (2009) 保育サービスの質に関する調査研究」厚生労働省、政策科学総合研究事業.
- 大谷 尚 (2008) 4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 — 着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学), 54 (2), 27-44

佐藤郁哉、山田真茂留 (2004) 制度と文化－組織を動かす見えな
い力. 日本経済新聞出版社.

サトウタツヤ (2011) ナラティブと対話的自己を取り入れた難病
患者ライフのふ厚い記述－厚生心理学の提唱. 科学研
究費助成事業研究成果報告書

サトウタツヤ (2013) 心理と行動に関わる理論. やまだようこ、
サトウタツヤ、能智正博、矢守克也、秋田喜代美編.
質的心理学ハンドブック. 新曜社

サトウタツヤ (2009) TEM ではじめる質的研究－時間とプロセス
を扱う研究をめざして－. 誠信書房. 99

Schroots, J. J. F., ten Kate, C. A. (1989). Metaphors,
aging and the life-line interview method. In Unruh,
D., Livings, G. (Eds.). *Current perspectives on
aging and the life cycle. Vol.3: Personal history
through the life course*, 281-298. London: JAI.

Wenger, E. (1998). *Communities of practice : learning
meaning and identity*. Cambridge University Press.

Wenger, E. & McDermott, R., Snyder, M. W. (2002) *Cultivating
Communities of Practice*. Harvard Business School
Press.

William James, 1890, *The Principles of Psychology*,

(平成27年 9 月30日受理)